
ウィザード うえざーど ~ ~ ~ カラー使いの暗殺者 ~ ~ ~

ちくは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィザード うえざーど~~~~カラー使いの暗殺者~~~~

【Nコード】

N7319E

【作者名】

ちくは

【あらすじ】

起源石を手に入れ日本に帰ること2週間、そろそろクリスマスに入るうという時季に少年は暗殺者と出会う普通の少年の見る普通じゃない世界第二段、発進！

暗殺者とハッカー

ただっ広〜〜〜い空を窓から眺め、エンジン音とテンの荷物ของの重さに足が痺れて来ている。

日本の冬は案外寒い……様々な宗教が無数に存在するこの国はいまクリスマスカラーの飾りが様々な店舗に飾られている。

「おいテン、まだか？」

空をぐつたりとした体制で覗きながら俺は居ない同居人の助けがくる事を祈っています。

二時間前……。

日本に来て2週間がたったどうも俺の日本は片言くさいらしくなれるまで母国の言葉でナビをしていた。

例によって例の如く、現場に動向する事を少々了解したテンの目になるべくクラックを繰り返している。

『地下の暗証番号の割り出しを頼むかな』

「オーライ任せろ……よし、ピンゴ」

『ターゲット確認かなー？さて撤収するよ』

「そろそろダミーの情報がばれるルートCから逃げろ」

指示するまでもなく赤い点は用意していたルートに進行している。

こなして四件目の依頼完了に安堵の溜め息をつく……ジャリ、と敷地の石を踏む音ジャパニーズマフィアの家には不似合いすぎる出で立ちの女が立っていた。

「お前が茜色の予報師か……」

「いつ！」

と、まあこんな感じだ俺自身も行きなり攻撃され、よければずもなくぶっ倒れる。

女は俺がテンではないと気付き、さっきの風格も何のその行列が渋滞した蟻のようにジタバタしだす。

「うあ〜やっちゃった〜、間違えた、どーしよー」

「うっ……」

「あ、生きてた……とりあえずゲット！」

「はあ?!?!?!」

言うが早い手早く応急処置を済ませ車の後部座席にわりと丁寧に乗せられる。

そのかん無駄に涙目で謝られるのだからたまったもんじゃない、悪い?のは向こうなのにこっちが悪いみたいだ。

そんなこんなで現代に至る。

「腹へったな〜」

「シヤケでいい〜?」

「うん……っておわあ?!生首」

そりゃビックリだ、テンの不思議技がいかに居るとは聞いていた能力を持つ人間この女もそうらしい頭と手首から上以外はないのだ。

「そんなに驚かせるつもりはなかったんだけど」

「……なあ、俺を捕らえる意味はあんのかよ」

女もお握りを食べているのをみてひとまずは大丈夫だと素直に受けとる。

「ああ?! 知るか! この馬鹿に聞け!」

「???!」

すこし垂れ目の優しそうな顔が一変して鬼のような形相でキレられる。

「たく! 最初から俺に任せれば茜色の奴と会えたんだ!」

「?!」

少し小ぶりの胸から煙草ではなくガムを取りだし噛み、流し目で俺を見ている。

「なんだガキ、俺の顔に何かついてるか?」

「……? もしかして二重人格? 初めてみたぜ、ほんとにいるんだ」

女は面倒くさそうに椅子を倒し寛ぐ、俺はそんな女を見ながらバカみたいに冷静な自分をミラーで一瞥する夜は長い。

「あんた名前は俺はフラディオだディオと呼んでくれ」

「うっせ、少し声を静かにしろよリーファは昨日寝てないんだよ」

「リーファ? それがあんたの名前?」

「俺はただの第二人格さ、こいつ個人がリーファなだけだ」

リーファ? は自分の首筋をナイフでなぞり嬉しそうに微笑む。

何となく目を背けると地響きと共に見慣れた茜色の傘がコンクリートを貫通している。

「おいリーファ、来たぜクールにな……うあわわ! 来た! よし!」

急にかわいらしい声をあげたかと思うと気合いを入れて車から降りる。

「あ、貴方が茜色の予報師ですね！私こつ言つ者です」

「あ、ご丁寧にどうも」

「つて！テメー！なに暢気に名刺交換してんだよ?!」

かっこよくテンの鋭い目付きをコンテナの上から放っていたのに次にはこれだ。

「あゝフラちゃゝん！」

「その呼び方ヤメーい!!その前に何とかしろ!!」

二人は何を?と?を浮かばせるがお互い目が合うとあゝ、と頷き見えなくもない速度で離れる。

「キングストン家の時期当主が僕みたいな便利屋に何のようだい?」

「キングストン家!?あの殺屋一族のか?!あのおっとりとしている女がトップ?!」

キングストン家、こつちの世界に入った一族、特殊な体術を駆使しどんな状況下でも100%の確率で成功させる、危険な集団だ。

因みに六代目の当主は日本人らしい。

「貴方に怨みはありません!でも私の為に死んでください!」

「……加減はしないよ、ディオを助けてるから待ってて」

急に目付きを鋭くする二人にやっぱり俺って普通だなゝと感じるのであった。

予報師 VS 暗殺者

テンは袖からナイフを滑らせ手に持ち、手足に巻かれたロープを切ってくれた、そして無言で買い物袋を押し付けて小声で喋る。

「ちょっとヤバいね、ディオは先に帰ってて戸締まりは確り合い言葉を知らない人は無視だよ、いいね」

「そ、そんなにヤバいのか？」

テンにしては余りにも固い表情だ、少しどんよりした雲のせいで月の光がテンの姿を隠した。

「4日たって戻らなかつたら狩崎って家を訪ねるんだよ、行っけ！」

「くっ！帰ってこいよ！」

フラディオの姿が見えなくなった瞬間に肩に痛みが走る、数秒動くのが遅れていたら左腕は無くなっているだろう。

とっさに傘を持ち開く、甲高い金属音の後横腹に蹴りを入れられた。

「げふう……くそ！」

「……脆い」

「左前方から突き、続いて回し蹴りのフェイクに混じり回転切り払いの確率80%」

予報通りの動きはするが……早い、無駄が無さすぎる。

「うぐっ……雨！」

「……タイプ・ブルー」

「くられ10トン分の水圧だ！ついでだ！氷柱！」

傘を媒介に豪雨は鉄砲水になりキングストーンに命中する、確実に仕留める為に一瞬にして氷結し叩き割った。

「……そんな……冗談じゃない」

「もう終わりですか？対したことはないですね」

キングストーンはずぶ濡れになりながらもダメージはない、それどころか此方にダメージまで与えている。

「うっ！投擲ナイフしまった左脚に」

「止めです、退屈すぎますよ……」

「マズイ！防御を！」

「！」

傘を持つ手に投擲ナイフが刺さる、キングストーンが着ていたコートがゆっくりと舞う何かの炸裂音、大量に降るナイフの豪雨。

「氷結！」

寸前の所でナイフの豪雨を止める厚い氷のドームはキングストーンには撃ち破れにいだろう。

いくら強くても所詮は……。

「タイプ・ブルー」

「とっ！」

淡い光と共に氷が消失する、鋭い突きと今度は赤い光にナイフが包まれる。

「タイプ・レッド」

「間に合え！」

振り下ろされるナイフを傘で弾くナイフはキングストンの手を離れ
廃ビルの壁に突き刺さるとパズルのピースのように壁がバラバラに
なった。

「……なんて奴だよ……雷！」

「タイプ・ブルー」

「また……不味いな何かの手は」

キングストンに自分の攻撃、能力、体術が通用しない唯一の救いは
肉体に能力の影響を受けず純粋な自身の戦闘力だけで向かって来て
いることだ。

「っー！」

不味いぞ、じり貧は勘弁だそれに使いたくないしな……さあ、どー
するテン。

「伏せる！」

「あれは！対MG用ロケット・バズーカ？！」

突然の声に驚き、黒光りする物体から弾丸が発車するそれを確認す
ると同時に柱の壁に頭を守るように隠れた。
爆風が廃ビルを焦がし、辺りが火の海になる。

「早く乗れ！」

「お前は？」

「いいから早く！リーファに見つかる前に！」

手を引かれバイクの後部に乗せられる。

「掴まってる！飛ばすから！」

「うぐう……なんて日だ」

昼のように明るかった廃ビルを抜け出し、すっかり暗くなった夜道を走るバイクは給油の為に一旦止まった。

「おえ……助けてくれて良かったよ」

「バァーロー、逃げるが勝ちって言葉を知らんのか！」

ヘルメットを外し、汗を拭う僕の為に全力疾走し助けに来てくれたのだろう。

「はあくあのバズーカ代で赤字だよ」

「いいよ別に、それより言い付けは守るべきだよ……まあいいや、でも人間相手にアレは」

「テンパってたんだから、しょうがねえだろ」

丁度いっぱいになったバイクを転がし支払いを済ませる。
すぐに事務所に戻り、一休みしたいのだ。

夜襲

事務所にもどり傷の手当てをする幸いナイフは浅く刺さっただけで
たいした事はないし、戦闘に支障はないと思う。

「うーん、さて言い訳はどーするよ？」

「アレは……そうだな取引先がへマをした事にしよう」

家計簿と予定表を見比べ唸るフラディオは、はっ！と何かに気づ
き僕に近寄る。

「……なあ、お前なんか……縮んでないか？と言うか幼くなってる」

「やっぱりあの狐野郎に今回の殺し屋で多様したもんな……君には
話してなかったけ？」

包帯を救急箱に戻しながら頷くフラディオは、冷蔵庫からレモンテ
イーをとりだしカップに注ぐ僕は構わず話を続けた。

「僕的能力は天候を操るって思われているけど違うんだ」

「……ほら」

「ありがとう」

レモンティーを受け取り、フラディオは僕の前にすわる。

「続けてくれ」

「予報や天候を操る力についてメインは逆転なんだ」

「逆転？」

「そう逆転なんだよ……例をあげるなら、晴れを雨にとか、分から
ないを解るにね……予報はその副産物で天候は回りに被害が少ない

から多用してるだけ」

「すごいな……じゃ飛べないを飛べるに逆転出来たりするんだな」

「そうだね、可能だけどねリスクもある僕は死ぬないし存在もしい、そして最大のリスクが若返るだ」

フラディオは頭がいいこれだけの情報でほぼ理解したのであるう。

「つまりは最終的に消滅ってことか……どーりでそのナリで28なわけだ」

「そーゆ事になるね、おそらくバツクにはアウトサイダー（異種人類）を狩るため組織が動いているよ」

「マジかよ、それでリーファを雇ったと？お前一人に随分物騒だな」

「そうだね、僕はある意味核兵器より強力な兵器になりうるしね…

…でも所詮全力開放しようものなら僕はどーなるか分からないし、半径300メートルの効果範囲しかないしな」

さすがにギョツとなるよな自分でもビツクリだ。

「もしかして起源石を集める理由って」

「そうだよ、もとの戻るヒントが有るかもね……フラディオ伏せて」

「うあー！」

予報が僕に教えてくれる、三秒後、手榴弾が投げ込まれた。

とっさに傘を開き伏せてフラディオを守る、耳がおかしくなるほどの爆発音と熱風そし瞬く銃声。

「くっ！早いもうバレた！」

「フラディオさん、茜色の予報師を渡してください、貴方は依頼に入ってない」

「うっ！」

サブマシンガンが額に押し付けられる、耳鳴りで聞こえずらいし頭が痛いそんなもん一瞬でぶっ飛ぶ。

「わかったその前に質問はいいか？」

「……………」

「肯定と受けとるぞ、まずテンを狙う理由は？」

「仕事です」

「第2に、アンタのバツクはだれだ」

「黙秘させていただきます」

「第3、見逃してくれねーか？」

「見逃しません」

「そうか！じゃあ……………ぐあ……………うっ」

催涙スプレーより早く腹を蹴られ拘束される。

「フラディオオ！」

「大人しくしていなさい、勝ち目は有りません駆逐されなさい」

「いい！逃げる！」

「くっ！」

俺は痛い腹を無視して抑えつけてたリーファを退かすそして銃を持つ左手にしがみついた。

「はやく！」

「くう……………ごめんなさい」

肩に冷たい感触と悪寒が走る、力が抜けてネットリとした体液が服を真っ赤に染めた。

不思議と痛みはない。

「ディオオオ！」

「大丈夫だ！」

「駆逐します！」

「じゃまだあああ！」

そう低く叫ぶと、傘を握りしめ走りだす。

「感情に呑まれた動きに……」

「うあああ！」

案の定かわれたはずだったが俺の視界がグニヤリと歪みテンの拳がリーファの顎にヒットしている。

「うう……ちっ！リーファ！くそ」

「うおおお！」

よろめく体軀は冷たい表情から苦渋の顔に変わる。

恐らく第2人格のほうに変わったのだろう、動きも少し違うしな…

…無駄に冷静だぜ。

「くらえ！」

「！」

撃った弾丸はテンの腹部を朱に染めるがまた視界がグニヤリと歪み、リーファが腹部を抑えた。

「っ、どーなってるんだよ?! た、タイプ・クリア！」

「無駄だあ！」

透明になりかけているリーファに傘をぶん投げた。

「なんで、ぐふう」

「はあはあはあ！デイト！」

俺は腰を抜かしたらしい、テンの肩をかり焦げたソファーに腰かける。

いつの間にか肩の怪我も塞がって来ていた。

「大丈夫か？」

「お前のほうがな、腹を撃たれたる？」

「問題ないさ、逆転の力を使ったからね」

幾ら郊外の静かな場所でもパトカーの光が近づいてくるのが分かる。リーファの腹を手早く見ると弾丸は貫通している、消毒をし最低限の治療をし車まで運ぶ、テンは必要な資料と荷物を運び事務所に火を放った。

「さて、行くか」

「また良いところ探さないとな」

「幾ら廃ビルだったって、都合よく立地がいい場所はないぜ？」

特に感情を込めずに話す俺らは勝手に住んでいた廃ビルから逃走した。

新戦力

一晩あけた朝、見事に白い雪が降りだしている日本に来て初めて雪を見た、狭い車内のせいで体が痛い。

「……………あ、事務所が」
「ふえ……………これわあ」

気の抜けた声をあげたのはリーファだ全身を芋虫の用に縛り上げ武器は全部没収した。

あのまま死なれてもいい気分がしないのでテンは連れ出すのに賛成してくれた。

「よ！僕の勝ちだよ！死にたくなかったら情報を渡してほしいかな」

「……………」
「……………」
「……………仕方ない」

固く目を閉じ、黙秘し続ける、ヤツパリ裏の家業だけあって覚悟は決まっていると示しているようだ。

「デイト！」
「お前がやれ……………ちょっと忙しい」

PCを直ぐに立ち上げ、情報の収集の日課を開始する。

「っ……………ふふ…ふいあははは！」
「はけえ〜！悶え死にたいか〜！」
「にやはははは！にやは…ふいあははは！」

こらオツサン、なにセクハラしてんだと想いつつ此れからの事を考える。

「ひいーひいー、ひ、卑怯です」

「素直にはくかい？」

「分かる範囲なら……ってなにほどこいてるのです！私は敵ですよ」
「いいんだよ、テンは気に入ったら敵も味方もねえから、じゃ話してくれ」

軽く頷き、縄の痕を心配しながら事情を話してくれた。

「ご存知の通り、私はキングストーン家の次期当主ですそして赤羽さんの殺害依頼はジェイコフ・シューバーとなのである人物に頼まれました」

「！カラー使いのシューバーかNo.3が……有名になったな僕も」

「じゃあ、アンタは頼まれただけなのか？それにあんたもテンと同じ能力者なのかよ？」

テンの条件に出来るだけ合う物件に丸を入れながら、聞いてみる、リーファはいいえと首をふり、首からペンダントをだす。

「シューバーさんから渡されました、これで我輩の能力が使えるとひび割れたペンダントを開くと赤と青そして白い着色剤が備えられている、俺は白いパウダーのような粉に触れてみる。

「タイプ・クリアと唱えてください」

「タイプ・クリア、！すごい俺透明になった！」

「効果は30秒くらいしかありませんが、物理的な攻撃なら完全回避可能です、そして赤は例えば、'斬る'と言う動作の効果を何倍にも増加してくれます」

「なるほど、壁がバラバラになったのには焦ったよおおかた青は中和かなんかの能力だろ？」

「そうです……まあ、リー君は使いたくなかった見たいですけど」

「リー君？ああ、口が悪いほうね」

テンもなるほどと頷き車のアクセルをゆっくり踏む。

「なかなか厄介だね……戦争なら他所でやってくれよまったく僕はもう軍人じゃないんだ、ただの便利屋で一児のパパだよ」

「……一児のなんだって……」

「パパだよ！僕は一応既婚者だよ！」

そう言つて上着のポケットから写真を取り出す。

そこにはテンで有ろう軍服を来た青年と同じく軍服を来た綺麗な女性そして三才くらいの男の子がテンに抱えられている。

「五年前の写真だよ……雪枝には戦死つて伝えてあるからね早く元の姿に戻つて普通のパパになつてみせるさ」

「……テン……お前にはもつたないな」

「綺麗な人ですね……決めました！私はテンさんのお手伝いをします！」

「おお！いいねえ、歓迎会だな！その後はカラー使いに諦めてもらおう」

能天気な奴だな、昨日は本気で殺し合いをしてたのにだがリーファがくるのは大賛成だ、やっぱ花がないとな。

「ううむ、キングストン家の秘蔵っ子も大したことはないな我輩
直々に勧誘をしなければいかんか」

モノクロの奥に見えるグレイの瞳は怪しく笑う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7319e/>

ウィザード うえざーど〜〜〜カラー使いの暗殺者〜〜

2010年10月28日07時12分発行